

金沢文庫蔵『見性成仏論』における『宗鏡録』の引用の意味

古 瀬 珠 水

はじめに

『見性成仏論』は一部の研究者により、達磨宗の文書と位置付けられてきた。その理由の一つに、『見性成仏論』が『宗鏡録』からしばしば引用していることがある。それは、石井修道氏の研究により『成等正覚論』が「達磨宗」のテキストであり、『宗鏡録』からの引用が多くされている特徴があることが明らかになっていることに依る。また、『見性成仏論』が『宗鏡録』の作者である延寿の思想を援用していると考えられる研究者もいる。しかし、『見性成仏論』における『宗鏡録』の引用方法、及び思想的受容の姿勢を考察すると、『宗鏡録』を引用するものの、『宗鏡録』の思想に追従しているわけではないことが解る。

本論では『見性成仏論』における『宗鏡録』の引用とと思われる箇所を拾い出し、それらの引用方法を検討し、『見性成仏論』の作者の『宗鏡録』に対する取り扱い方とその思想に

ついて考察する。

一 『見性成仏論』における『宗鏡録』からの引用方法

『見性成仏論』には『宗鏡録』からの引用は、筆者が数えるところ七箇所である。本文に「宗鏡ノ録ニハ」、「宗鏡ニ云ク」と明確に示している箇所は四箇所である。残りの三箇所は本文に記述は無いが、『宗鏡録』からの引用文であると考えられる。本論では紙幅の都合上、二箇所の引用について論じる。(尚、『見性成仏論』は、理解しやすいように筆者による漢字と平仮名交じりの訓読文を使用した。『見性成仏論』に於て明らかに引用部分とわかる箇所は《》で括った。「」または□は判読不能、「」は筆者が原文の誤りと考えた箇所、「」は筆者が補ったことばをそれぞれ示す。更に『金沢文庫資料全書 第一巻禅籍篇』は『金見』と略した。)・『見性成仏論』

金沢文庫蔵『見性成仏論』における『宗鏡録』の引用の意味（古瀬）

『宗鏡の録』には、《五陰即ち菩提なり。是を離れて菩提無し。菩提以て、菩提を求むべからず。菩提を以て）菩提を得べからず。》と云へり。《文殊は、我、何を以ての故に菩提を求めず。菩提即ち我なり。我即ち菩提なり。》とのたまへり。（『金見』一七九頁上）

・『宗鏡録』巻二二

五陰即菩提。離は無菩提。不可以菩提而求菩提。不可以菩提而得菩提。文殊云。我不求菩提。何以故。菩提即我。我即菩提故。（『大正藏』四八、五三八上）

右部分は『見性成仏論』の問答第一の答えの部分だが、『宗鏡録』巻二二から引用していることが解る。語句の異同は殆んど無いが、それぞれに投げかけられた質問は少し違うことが解る。『宗鏡録』では「問。菩提即自身心者。云何教中説。」⁽¹⁾と言う問い掛けである。経論に書かれた「菩提」について説明を求める質問している。一方、『見性成仏論』では、「如何んしてか生死の海を渡りて菩提の山には登るべき。」⁽²⁾どのようになれば悟りの世界に行けるか、と直接答者の考えを尋ねている。

次に『宗鏡録』では、菩提について定義した後、「經に云く」と複数の經典から相当することばを引用している。そして、注意すべき点は次の部分である。（傍線筆者）

若就了人。即達陰身本空。妄心無相。以本空故。法身常現。以無

相故。真心不虧。如此發明。五陰即菩提。離は無菩提。不可以菩提而求菩提。不可以菩提而得菩提。文殊云。我不求菩提。何以故。菩提即我。我即菩提故。（『大正藏』四八、五三八上）

と「若し了人に就かば」又、「此の如く發明せば」と、一定の条件を提示して、「五陰即菩提。離は無菩提。云々。」と結んでいる。『宗鏡録』では「菩提」は「これから獲得するもの」と捉えている。しかし、『見性成仏論』は同じ考え方をしていない。「生死も無く、滅せる菩提も無し」、「歸せる菩提も無く」、「菩提はもとより失せざれど、みだりに、證せんと思ひ得せむと思へり。」（以上『金見』一七六頁上）などと、菩提と衆生の世界を分けて二見を持つことを否定していることが解る。

これは、『宗鏡録』における「一心」と『見性成仏論』の「一心」の考え方が異なることに依ると考えられる。『宗鏡録』百巻中には「一心」について述べている箇所が多く有るが、ここでは巻二と巻八三の「一心」を取り上げる。

又先德云。如來藏者。即一心之異名。何謂一心。謂真妄染淨一切諸法無二之性。故名爲一。（『大正藏』四八、四二五中）

延寿は先德のことばとして、如來藏が一心の異名と言う。その一心は、相反するすべての現象を含めることを述べている。

問。一心開真如生滅二門。有何所以。答。甚有功能。深詣事理。

一心者。起大乘之信。二門者。破邪見之執。約真如門信妙理決定。約生滅門信業用不立。可謂理事圓通。真俗無滯。(『大正藏』四八、八七三下)

『起信論』に従い、「一心」つまり「心」を開けば「真如門」と「生滅門」の二つの側面があり、それぞれに役割があり、互いに深く事理が円通していることを説く。一方、『見性成仏論』における「一心」は清浄な一つの心しかないと述べる。例えば次のような文である。

菩提を願はんよりは、煩惱菩提は一心なり(と) 悟らむことを願うべし。(『金見』一七七頁下)

三諦は假立にして一心のみ真實なり。(『金見』一九二頁下)

菩提と煩惱は一心にあるとし、二つに分けて考えることを戒め、三諦論の考え方を批判し、心を三つに分けて考えるべきでないとしている。これらの「一心」の考え方は、例えば、黄檗希運の教えを纏めた『伝心法要』にみられる「一心」と重なりあうと考えられる。『伝心法要』では、次のように言う。

唯此一心即是佛。佛與衆生更無別異。(中略) 此心即是佛。更無別佛。亦無別心。⁽³⁾

自達摩大師到中國。唯說一心唯傳一法。⁽⁴⁾

不起二見不厭不欣。一切諸法唯是一心。然後乃為佛乘也。⁽⁵⁾

「心」は清浄な心一つであることを繰り返して述べている。また、『伝心法要』では、清浄な心以外に気持ちを向けること

を戒めている文がある。

學道人一念計生死即落魔道。一念起諸見即落外道。⁽⁶⁾

『見性成仏論』では『伝心法要』からの直接の引用を見ることはできないが、思想内容は『伝心法要』に近いと見てよいのではなからうか。

・『見性成仏論』

宗鏡に云く、《東國の元曉と義相との二法師、唐國に同(じ)に來て師を尋ねて夜に遇う。宿〔荒れて〕、場内に於いて止むる。元曉法師、渴に因りては漿を思いて、一泓水を見て、掬(して)飲(む)に、甚だ美なり。及びて天を明くるに至り、是の屍の汁(を)觀るに、心惡して〔之を〕吐して、〔豁〕然として大悟(す)。乃ち曰く、我、佛の言を聞く。三界は唯心に万諸は唯識。故に美は惡は我に在りと。實には水には非(ざり)けるをや」と云へり。(『金見』一八九頁上)

・『宗鏡錄』卷一一

如昔有東國元曉法師。義相法師。二人同來唐國尋師。遇夜宿荒。止於塚内。其元曉法師因渴思漿。遂於坐側。見一泓水。掬飲甚美。及至來日觀見。元是死屍之汁。當時心惡。吐之豁然大悟。乃曰。我聞佛言。三界唯心。萬法唯識。故知美惡在我。實非水乎。遂却返故園廣弘至教。(『大正藏』四八、四七七上)

両者の語句の異同はいくつか認められるが、内容が大きく変わることはない。ところで、『宗鏡錄』が元曉法師の逸話の主旨をどう捉えたかは、右の引用部分の前後に次のように

金沢文庫蔵『見性成仏論』における『宗鏡録』の引用の意味（古瀬）

述べられている。

千經萬論。只說汝之一心。一切法不生不滅。即是大涅槃果。所以道。果滿菩提。圓華開世界起。故知菩提果滿。結自心華。世界緣興。始於識浪。如昔有東國元曉法師。義相法師。（中略）故知美惡在我。實非水乎。遂却返故園廣弘至教。故知無有不達此者。頓息遊心。任負笈携囊。廣歷三乘之學肆。縱尋師訪友。遍參法界之禪局。若欲絕學栖神。究竟應須歸於宗鏡。（『大正藏』四八、四七七上—中）

つまり、延寿は自分自身の心がさとりの世界であると気づけば、それが弘く学んだことになるという。例として元曉法師の逸話を述べ、遠方まで師を尋ねずとも「絶学栖神」（学ぶのでは無く、心を集中させる）すれば「宗鏡」（一心）に帰ることができるとしている。

ところが、『見性成仏論』では、「善悪はない」ことを説明する為に、元曉法師の逸話を引用している。しかも、『宗鏡録』では「知美惡在我」（美味しいか不味いかは自分自身が知る）と述べているが、『見性成仏論』では「美惡」を「善惡」に変えて論じている。元曉法師の話しの前後には次のように述べている。

分別せざらましかば、善惡なからまし。然れば、善惡自ら名乗らず。唯、是、妄想よりお（れよ）（これ）り。（『金見』一八九頁上）ここに知れぬ者には善惡なかりけり。唯、是、由無き心の思ひなり。善とも惡とも思はざる時には、善惡法は無き□（な）り。（『金

見』一八九頁上—下）

つまり、『宗鏡録』では「師は無くとも、自身で三界唯心と気づくこと」の重要性を元曉法師の逸話で示すが、『見性成仏論』では、もともと「善悪はない」ことを説明する為に『宗鏡録』の本来の意図とは少し違う目的で引用していることが解る。『見性成仏論』では分別の無い境地こそが本来空寂な状態であること示唆している。このような二見を持つべきでないことの教えは、前述した『伝心法要』の教えと共通していることが解る。

結論

『見性成仏論』は『宗鏡録』からその主旨全体を踏襲しているわけではない。また『宗鏡録』の本来の目的とは別の目的で逸話を引用し、自らの思想に巧妙に取り込んでいる。従って、『見性成仏論』の作者が延寿と同一の思想を有していたと考えることに疑問を呈する。

- 1 『大正藏』四八、五三七下。
- 2 『金見』一七五頁下—一七七頁上。
- 3 『大正藏』四八、三七九下。
- 4 『大正藏』四八、三八一中。
- 5 『大正藏』四八、三八一中。
- 6 『大正藏』四八、三八一中。

〈キーワード〉 『見性成仏論』、『宗鏡録』、『伝心法要』

（鶴見大学仏教文化研究所兼任研究員）